

令和元年度 伊南福祉本部事業報告

法人本部の運営に関し、理事会を4回、評議員会2回を開催しました。

国は、持続可能な介護保険制度を維持するため、団塊の世代が後期高齢者に達する2025年に向け様々な改革を進めています。特に高齢者が住み慣れた地域での生活を継続するための地域包括ケアシステムに向け、医療・介護の見直しが進められています。

こうした中で、観成園では空床利用等により稼働率増や、特定介護職員処遇改善加算により介護保険収入が増加しました。支出については処遇改善により人件費が増えたものの昨年度並みの黒字を確保することができました。

フラワーハイツでは、施設目的である在宅支援に努め、超強化型老健として年間通して運営することができました。入所については利用者数に大きく変わりませんでしたがセラピストの退職等により介護保険収入は前年度並みとなり、収支では昨年並みの黒字を確保できました。

順天寮では施設を最大限生かし入所需要に対応したことで入所者数が増加し収入を確保することができ、施設整備等積み立てを行ったうえで前年並みの黒字に、また指定共同生活援助事業所も平均利用者数増加により安定的な運営となっています。

訪問看護ステーションでは、訪問件数について前年比で介護保険は微増、医療保険8%、全体では3%減少したものの事業活動収入は前年並みに、一方職員体制整備や業務ソフト導入等により経費が増加したものの黒字を確保することができました。

こうした努力により、前年度に引き続き全施設会計共に黒字決算とすることができました。

当法人も含め、福祉業界での最大の課題は人材の確保です。処遇改善加算を活用しつつ経営面を考慮し、職員の処遇改善を進めています。

また、年度末に発生した新型コロナウイルス感染症の感染拡大抑制対策による経営面への影響等、厳しい状況が続きますが、ご利用者、ご家族により良いサービスを提供するために、たゆまぬ研鑽による自己啓発の努力を重ね、顧客満足度の向上に向けた取り組みを今後も継続してまいります。

令和元年度 観成園事業報告

観成園は、「安心・笑顔・その人らしさ」の介護理念のもと、ユニットケア型の特長を生かして「尊厳ある個別ケア」を進め、ご利用者の個性や生活リズムを尊重する中で穏やかな生活を送れる場所となるよう「家庭生活の延長線上にある施設づくり」に職員一丸となって努めてまいりました。

当初予算では、2千万円を超える赤字予算を計上したところですが、収入・支出の両面で一層の経営改善に取り組んだ結果、当期資金収支差額は3千2百万円余の黒字に、当期活動増減差額は2千9百万円余の増となりました。

利用状況は、特養定員110人に対して月平均の入所者数107.6人、稼働率97.8%、短期入所は定員10人に対して月平均の実利用者数40人、稼働率104.9%でいずれも前年実績を上回りました。

収入面では、介護報酬の改定に伴い新設された特定処遇改善加算を活用するとともに、従来からの各種加算を適切に運用することで収入増を図り、加えて空床利用など稼働率向上に努めた結果、介護保険事業収入は予算を大幅に上回りました。

支出面では、介護職員の処遇改善により夜間手当を大幅に増額しましたが、介護職員が人員計画を下回ったことから人件費支出は予算に対して減となりました。また、施設・設備・器具備品の修繕・更新等を計画的に推進することで、施設の長寿命化と介護環境の改善を図るとともに、経常経費の節減に努めた結果、事業費支出は予算に対して減となりました。人材確保と人材育成は長年の課題ですが、引き続き取り組みを進めてまいります。

運営面では、ご利用者の健康管理や身体機能の維持向上に努めるほか、地域の皆様はじめ各種団体、ボランティアの皆様のご協力をいただく中で、年間を通して様々な行事や防災訓練、喫茶などを実施・運営しました。ご利用者が生きがいや楽しみ、四季の移り変わりを感じてもらえるよう生活を支援するとともに、地域の皆様には観成園への理解を深めていただく機会となりました。

特筆する事項として、国内で新型コロナウイルス感染者が増加し始めた2月以降、ご利用者の安全・安心を最優先とする事業継続計画を策定し、感染防止対策にあたってきました。

園内のクラブ活動や全体行事などを中止し、家族の面会や業者の入場を制限するなど、外部からウイルスを園内に持ち込まない対策をとりました。また、職員の出勤前の検温、マスクの着用、手指消毒、共用部のアルコール消毒など職員がウイルスを園内に持ち込まないよう感染防止対策を徹底しました。

その上で、近隣地域において感染者が確認された場合には、ご利用者の安全・安心を確保する観点から、短期入所の受け入れを休止する対応について関係機関と協議してきました。その後、近隣地域において感染者が確認される状況に至りましたが、地域の在宅介護を支えるためには短期入所サービスを継続的に提供することが求められていることから、より一層の感染防止に努める中で短期入所サービスの提供を継続しました。

令和元年度 フラワーハイツ事業報告

「ご利用者の尊厳を守り、家庭復帰を支援し、地域や家族とのふれあいを大切に、常に明日を見つめた活気のある明るい施設を目指す」の理念のもとに、運営方針を「在宅支援施設としての老健の機能強化へ向けて」とし、職員・関係者が一丸となって、介護老人保健施設の目的である在宅支援機能を十分に発揮できるよう努めてまいりました。

令和元年度の利用状況は、入所者数は前年度並に、短期入所は8.9%増加し、合計では1.5%の増加となりました。

リハビリ利用者数は通所リハビリが4.3%増加、訪問リハビリは職員の退職等により44.3%と大きく減少となりました。

居宅介護支援事業の介護給付件数は、予防給付で8.0%、介護給付では2.4%それぞれ減少しました。

経営的には、在宅復帰率の向上が図られ、令和元年度は年間通して超強化型老健として運営することができ、老健施設としての役割を果たしていることを示すことができました。

また、行政や保護者からの要望に応え事業開始した重度心身障害児童の日常生活支援のための障害福祉サービス 短期入所事業は定期的な利用がありました。

この結果、経常経費の節減に向けた職員の努力もあり前年度に引き続き黒字決算となったものの、年度末から新型コロナウイルス感染の影響により感染防止のため通所リハビリ利用者の減少や、短期入所者の退所見送り等により影響が出ています。

施設整備等については、今後必要となる介護システム、電話・ナースコール更新、介護ロボット(センサーロボット)導入に対応するため、Wi-Fi環境整備を行いました。

施設は築27年を経過し設備等の整備について、設備機器の更新や備品・什器類の更新について、計画的に整備していく必要があります。

地域や家族とのふれあいの場として、夏祭りや敬老会などの行事や季節に合わせた諸行事、教養娯楽活動、ボランティアの受入れ、地域との交流などを実施するとともに、地域協定に基づく防災訓練は多くの住民の皆さんの参加をいただき、施設に対する理解を深めていただく機会にもなっています。

さらに、ご利用者本位のサービス向上・在宅支援をめざして、接遇向上のための自己啓発活動に取り組んでいますが、引き続き、ご利用者・ご家族、地域から信頼され喜ばれる施設運営をめざしてまいります。

令和元年度 順天寮事業報告

救護施設は、生活保護受給者であって居宅生活をおくることが困難な人が、安心して暮らしながら自立に向けた訓練を行うことを目的とした施設であり、順天寮は、①利用者の人権尊重、②清潔で潤いのある施設、③質の高いサービス、④地域福祉への貢献を基本方針として、事業を行っています。

令和元年度は、主に以下の取り組みを行いました。

- (1) 入所定員 60 人に対して、年間平均入所者数は 65.5 人と、施設を最大限に生かして入所需要に対応しました。また通所・訪問事業の年間平均利用者数は、前年度の 5.4 人から若干減少し 4.4 人となりました。
- (2) 入所生活からの自立に向けた居宅生活訓練や就労訓練は順天寮の中核事業と位置付けて取り組んでいるほか、生活困窮者自立支援法に基づく生活困窮者就労訓練、触法者の自立準備を支援する「自立準備ホーム」の実施など、就労・自立への流れに力を入れてきました。
- (3) より適切で高度な福祉サービスを提供する事業者を目指して、第三者機関による評価を受審しました。評価結果は、今後の運営方針や改善策に生かします。
- (4) 居室の洋室化・エアコン設置や、赤い羽根共同募金を活用した自動車配備など、利用者の生活・就労訓練環境を向上させるとともに、節電・節水等による経費削減を進めました。
- (5) 中長期計画に基く目標管理や、各専門職を横断した委員会活動などにより、組織強化と人材育成を図りました。

これらの結果、70 人弱の要支援者の安定した暮らしを支えるとともに、3 人の方の自立に向けた道筋をつけるなど、救護施設の責務を果たすことができました。また経営的には、当期資金収支差額合計は、1,000 万円の施設整備等積立金の積み立てを行ったうえで 1,600 万円を超える黒字を計上することができました。

引き続き、組織・施設の機能強化を図りながら、安定した経営と地域福祉の向上に努めてまいります。

令和元年度 指定共同生活援助事業所事業報告

平成 29 年 8 月に定員 4 人のグループホーム「南天」を開所し、2 年 8 か月が経過したところです。主に順天寮で居宅生活訓練を修了した方々が共同で社会生活を営むためのグループホームで、食事や金銭管理などの生活援助を行うとともに、利用者の多くは、順天寮の通所事業を併せて利用しており、両事業の連携により地域での自立を支援しています。

令和元年度は、年間平均利用者が 3.8 人で、前年度の 3.7 人を上回り、概ね空室がない安定的な運営となっています。

設備としては、外階段への手すり設置、駐輪場の整備など、より安全で利便性のあるグループホームとなるよう整備を実施しました。

経営面では、安定した入居状況による 640 万円の収入に対して、支出は順天寮会計への 50 万円の繰り戻しを加えても 550 万円に収まり、93 万円の黒字を計上することができました。

平成 29 年度に救護施設順天寮会計から繰り入れた 300 万円に対して、平成 30 年度、令和元年度で 50 万円ずつ繰り戻し、残額は 200 万円となりました。また、当期末支払資金残高は 430 万円余となっています。

令和元年度 伊南訪問看護ステーション事業報告

伊南訪問看護ステーションは、地域包括ケアシステムが構築・推進されるよう居宅介護支援事業所を併設し、緊急24時間対応、人生の最終段階のケア、小児を含めて重症度の高い方の受け入れや情報提供、相談、人材育成などを行う機能強化型ステーションです。

訪問状況では延べ訪問数は前年度比3.0%減となりました。介護保険については微増でしたが医療保険は7.7%減という結果です。居宅介護支援利用者数については7.8%増となっています。看護の内容については、看取りに関わった件数が44件と増加しそのうち自宅での看取りは34件でした。また、緊急対応は487件で55件増でした。

経営的には事業活動収入合計は昨年度並みでした。一方で支出は職員体制整備についての人件費が前年度比10.0%増、また訪問看護業務ソフトの導入にて事務費支出が前年度比22.5%増と大きく影響がありましたが黒字で終了することができました。

今年度は看取りに関わる件数が伸びました。訪問看護には利用者が自分の意思を尊重するアドバンス・ケア・プランニング（人生会議）の実施等にも大きな期待が寄せられています。

事業所の活動としては、駒ヶ根市と協力して自宅での看取りをする家族の不安をやわらげるように「旅立ちガイドブック」を作成、また地域住民に向けてフォーラムや県医師会主催の在宅医療シンポジウムで発言したり、新聞掲載記事に利用者家族と共に協力したりと、発信や啓発活動に職員全体で取り組んできました。今後も訪問看護の役割や専門性や繋がりということを再認識して貢献に努めていきます。

新事業として今年度から認知症グループホームへの訪問が始まりました。加えて、今後は児童発達支援事業の放課後等デイにも訪問開始が予定になり準備をしており、また昭和伊南病院での“医療・介護の相談窓口”を委託されています。これからも地域の声に柔軟に応えられるよう取り組んで参ります。